根岸英一先生追悼　令和３年７月 21 日（水）全校集会校長の話より

今年６月６日に８５歳で亡くなった本校第２８回卒業でノーベル化学賞受賞者である根岸英一先生が、東京大学工学部応用化学科の大学３、４年生の当時に書いた文章を紹介します。

昭和３２年、３３年、学年縦断的なクラス雑誌「あるけみすと」にそれぞれ掲載された文章の一部です。因みに当時は「もはや戦後ではない」と経済白書が宣言した時代です。

日本の化学技術について、「(外国の) すぐれた点をどんどん輸入するのは一向にかまわないと思います。しかし、輸入一方で輸出するのは味の素ひとつでは寂しいと言うのです。まねも結構でしょう。しかし、なにからなにまでさるまねをしていて自分からは何一つ創り出さないでいるのでは、いつまでたっても外国よりある距離をおいてうしろにいなければならない。」

人間学について、「今日本で一番必要なことは、…借りものではない、しっかりした精神的なバックボーンを持つことだと思う。…日本は今こそ進むべき路をあやまることなく、正しく大人として成長しなければならない時に来ていると思う。」

当時の化学技術に対する焦燥と、それに対する処方箋が簡単に実現できない現実が、その後根岸先生をアメリカに向かわせた原動力になっていたと考えられます。

「最も困難な道に挑戦せよ」根岸先生はこれを地で行き、突き抜けた方だと思います。根岸先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

Always do what you are afraid to do.

神奈川県立湘南高等学校長　池辺　直孝